

## 編集後記

『親鸞教学』第九四号をお届けします。本号の巻頭には、谷眞理教授の「部落差別問題と真宗学」と題する論考を掲載しました。ご自身の体験を踏まえ、部落差別問題から問われたことを掘り下げ、「問いを学び」「問いに学ぶ」大切さを、真宗学を学ぶ者の課題として提起してくださっています。

真宗総合研究所研究補助員の小野賢明氏には、「選択本願の行信―本願の行信に開かれる生―」と題して、日頃の研究の成果を発表していただきました。題名が示す通り、選択本願の行信においてどのような生が開かれるかが論じられています。

藤嶽明信教授の「本願念仏の「道」は二〇〇八年一〇月二三日（木）に行われた真宗学会大会での講演録に加筆訂正をいただいたものです。親鸞の生涯を貫くのが「本願念仏」であるという見定めのもと、本願念仏の意味が善導・法然・親鸞を通して尋ねられています。

細谷昌志大阪大学名誉教授の「『逆対応』の論理と『逆超越』―キェルケゴ―

ルの「死にいたる病」をめぐる―」は、同じく真宗学会大会における講演録に加筆訂正をいただいたものです。西田幾多郎が提起した「逆対応」の論理を踏まえて、人間の根源的悪の問題を「逆超越」という観点から述べてくださっています。両先生には、講演録掲載に際して加筆訂正の労をお取りくださり、誠に有難うございました。

以上の論文、講演録に加え、金子大栄先生の講義「『教行信証』の諸問題」および安田理深先生の講義「入出二門の源泉」の筆録を掲載いたしました。どうぞ御味読ください。

すでに今年度も後期に入ったが、今春、真宗学科は九十一名の新入生を迎えた。学部・大学院を合わせると四〇〇名を超える。なかなかの大部分である。問題関心に異なりはあっても、共に真宗を学ぶ仲間の存在は大きい。関心が異なればこそ、新たな視点、新たな課題が見つかる。

世間では損得が最優先される風潮が相変わらず根強い。その中にあって、学びも安易な答えを求めることに流れやすい。

知識も役に立つか否かという基準のみで計られ、情報の一つに成り下がっているように思われる。本当に知るべきことは何なのだろうか。

かつて安田理深先生は「つまらない答はあっても、つまらない問はない」とおっしゃった。周りからどれほど陳腐に見えても、本人にとって一旦気になったことは譲れないはずである。問うことが学びを進める。大事なものは、お手軽な答えにとどまらないこと、問うのをやめないことである。

この意味で、親鸞ほど問い続けた人はいないと思われる。一乗仏教の根本道場で学びを重ねながら、仏教とは何か、何をもって仏弟子と言えるか、どこで本当の一乗が成り立つのか、そもそも仏とは何か、等々。数え上げればきりがないほどの疑問を抱えて、学び続けた人である。

『親鸞教学』という時、親鸞が遺した言葉だけに執られてはならない。親鸞の言葉が生み出される背景に思いを致し、親鸞が問題にしたことを問い尋ねていかねばならない。

(文責 一楽)